会報第 14 号 合評会の記録

会報 14 号の合評会が 2000 年 11 月 18 日、工藤明美氏の司会の下に開かれ、執筆者全員を含む会員 14 名が参加した。各論文について、執筆者およびコメンテータの発言を基に活溌な討論が展開された。 (記録：徳間・塩旗)

1. 宮入いずみ「裘山山とその作品について」

「取り上げた《寂寞高原》は、選集収録時に一部削除されていたことを後で知った。改稿前との比較をしたかった」というのが執筆者の弁。コメンテータの天野氏から「作者の経歴がよくまとまっていた。ただ、作品の『読後の爽やかさ』とはどんなところにあるのか、説明が欲しかった」等の指摘。執筆者は「説明を入れ、論を展開した方がよかったと思う」と答えた。

2. 鷲巣益美「述平の描く『事件』について」

執筆者は「張藝謀や姜文との仕事で成果がある。《有话好好说》はヒット作でもあり、紹介する価値がある」と発言、コメンテータの赤羽氏は「あまり知られていない作家の紹介として、概括的によく伝わってきた。ただ『出来上がったものは中心部に空洞を抱え込んでいる』という指摘は疑問」等と述べた。これに対し「『空洞』の語は不適切だった。わけが解らないという状態のことを指したかった」等の見解が示された。天野氏から「他の作品を読んでみた。そういう気にさせる良い紹介文だった」との発言、また加藤氏からは「掲載誌がほとんど《作家》に集中しているのはなぜか」との質問があった。この点については、事情はわからないということだった。

3. 栗山千香子「〈印象〉のディスクール——史鉄生『鐘声』論」

執筆者から「史鉄生の作品に難解なものが多かった時期に、一読して解りやすく良い作品という印象を持った。後に《务虚笔记》を読み、繋がりが腑に落ちた。それが論文執筆の契機となった」との発言があり、コメンテータの布施氏から「栗山論文の三つの時間軸の設定という分析により、『ある日の午後』が執拗に繰り返されている意味、結末の意味等が明らかになった。また、史鉄生における「印象」の意味を明確に示し、いろ

いろな人々や時代の物語へと広がりを持つこの小説の楽しさを味わわせてくれた」との評がなされた。徳間氏から「呉義勤《中国当代新潮小说论》が挙げている『新潮小説』のディスクールの特徴の一つに『記憶』があり、似ている。時代のディスクールという面もあるのではないか」という指摘が出され、「切り口としての『記憶』は流行でもあったが、史鉄生にとっては唯一の行き着く先。原点見つめたら自然に行き着いた」という見解が示された。加藤氏の「日本人の史鉄生好きは不思議なくらい。どうしてか」という疑問に対しては、「日本の私小説や心境小説の伝統に近いものがあるのではないか。史鉄生作品は日本では稀ではなく、中国では異質だと思う」との答え。また、タイトルに関して天野氏が「『ディスクール』という言葉をあえて使った必然性」を問うたのに対しては、「『印象』といい『ディスクール』といい、陳腐な言葉を使ってしまったが、社会との関わりではなく、『書かれ方』そのものを問題にした」ためであるとのことだった。

4. 杉野元子「王朔『看上去很美』について」

まず、執筆者から「対象とした小説自体は作品論に取り組むほど面白い作品ではなかったが、作家の生い立ちを知りたかったので、取り上げた」と執筆の動機が語られた。コメンテータの田井氏からは「社会学的アプローチが面白かった。次の質問をしたい。①作家としての王朔をどう評価しているか。②現在の中国では、彼のようにメディア戦略を取らないと作品は売れないのか。③90年代以後書かなくなった作家は多く、例えば梁暁声は評論に流れたが、彼らの傾向と時代との関連をどう見るか」と3点の質問が出された。これには「自分とは合わない作家だという感じを最初から抱いている。作家としての王朔はあまり評価していない。90年代初めのあの王朔ブームが自分には理解できない。梁暁声の方がすぐれていると思う」との答えであった。工藤氏の「王朔と老舎を比較して論じたのを新鮮に感じた。オリジナルなのか」という問いに対し、「まだ誰も比較していないと思う。北京という街、胡同文化を考える上でよい材料だった」との答えがなされた。

6. 徳間佳信「祝祭空間としての『受戒』」

執筆者から「当初、『豊饒・再生』をキーワードにし、作品分析と作品外の要素から作家を論じてみたかったのだが、長すぎたため3分の1程度にそれを縮小せざるを得ず、作家論の部分を削除し、『祝祭』をキーワードにして書き直した。このため、自分でも不満な箇所が多い。もう一度書き直したいと思っている」との発言があり、次いでコメンテータの佐藤氏が「いい意味での偏愛を感じさせる論文だった。しかし、既成概念が作品分析を縛っていないか」と提起し、問題点として①「祝祭」と「祝祭性」の区別は何

か。②作品からあるイメージを取り出して象徴するものに置き換える論述は顛倒であり、そのイメージを多用することでどのような作品世界が創出されたかを示している部分の方に説得力が感じられた。③「祝祭性を前景化するために苦しみや対立や矛盾を捨象し」とあるが、「前景化」したのは徳間氏。『受戒』の清新さは時代の空気と切り離せないのではないか」等を挙げた。また、注に関しては後半は整理する半面、松浦氏の先行論文を挙げる必要などが指摘された。これについて徳間氏は「当初書いたものでは触れていたのだが、削除した」と応じ、③については「この作品が三中全会後のある種祝祭的な気分の中で書かれたというのは、作者の作品解説などを引用して論じた」、①については、「『祝祭』そのものが書かれているものを『祝祭』、祝祭的な要素が日常にも浸透している状態を『祝祭性』として使い分けた。最初から『祝祭』で切ろうという意図はなかった。既成のタームで括ったという印象を持たれるのは、論証不足のせいだと思う」と回答した。一方、工藤氏は「『祝祭性を前景化するあまり、捨象している部分があまりにも多い』のは、この作品に限らず作家の若い時から一貫している方法なのではないか」と疑問を提起した。徳間氏は「汪曾祺は『受戒』発表後、『廟と僧』という作品の存在も、『受戒』の経験的な基になった僧庵生活も、日本軍からの避難だったことも隠し続けた。自身が文革中に果たした役割にきちんと向き合うこともついにしなかった。これらは、祝祭性を前景化し、諸々の矛盾を捨象する書き方とパラレルな関係にあるのではないか。切り離して作者自身の方法論だと言うなら、その通りだと思う」と答えた。

7. 天野節「高暁声の略歴と作品」

執筆者から「《"漏斗户"主》の作品論のための必要と、中国農民にとって革命とは何だったのか、という驚きと失望に衝き動かされて書いたが、紙面の制約から大幅に削除せざるをえなかった」という発言があった。コメンテータの加藤氏は「作家の年譜は、研究の基礎資料として後に残る。天野さんは作家に直接会っているし、近親者とも親しいので適任だと思う。だが、年譜については、72年以降から死去までの部分がないことと、作家本人の言と天野さんが整理したことがはっきりしない部分があり、明確にしたほうがいい。誤植も目立つ」と指摘した。また、徳間氏が「年譜記載の、恋人を餓死同然にしてしまったことと、子連れの農民女性と再婚したことを読んで、陸文夫が追悼文で書いていた『家、家』という高暁声の最期の言葉の意味が解った。高暁声の文学を考える上で重要な伝記的事実である。天野さんが初めてはっきりさせたことなのか」と質問したのを受け、天野氏は「そうだと思う。中国の研究でもまだ指摘されていない。生年月日にしても、息子が思い違いしていたり、明らかにしなければならないことはまだある」と述べた。